

長野県立歴史館たより

2022年 春号 vol.110

特集

2022年
所蔵品展 至宝の名品

—— 学芸員のイチオシ

考古資料編 ——

大地からのメッセージ



令和4年度の歴史館

長野県立歴史館特別館長 笹本正治

長野県立歴史館は皆様もご承知のように、歴史博物館としての位置づけと、長野県の歴史公文書等を収集・整理・保存、活用する公文書館機能を合わせ持つ複合施設です。長野県が作成した現用文書は、保存期間が満了すると、歴史公文書（歴史を後代に伝えるために重要な意味を持つ資料）として保存することが適当と認められた文書について、長野県立歴史館が保管しています。

2017（平成29）年に学校法人森友学園への国有地売却に際して大幅値引きが発覚し、当時の安倍晋三首相が自身や夫人の関与を国会答弁で否定しました。国会答弁と決裁文書の内容のつじつまを合わせるため、学園側との交渉経緯や首相夫人らの名前の記載があった文書14件の300カ所以上が改ざんされたことは記憶に新しいと思います。このことを通じて公文書の管理に国民の関心が集まりました。

長野県では2019（平成31）年3月に策定した「公文書管理の見直しの基本的方向性について」に基づき、「長野県公文書等の管理に関する条例」が制定されました。この条例は公文書等の管理に関する基準を定め、歴史的に重要な文書が適切に保存、利用できるようにするため、県民の財産である公文書の管理上きわめて大切な条例です。その施行日が本年4月1日です。この条例の下に保存期間満了後の公文書等は県立歴史館に移管されます。長野県立歴史館は依然として正式な公文書館になっていないにもかかわらず、本館の公文書館的な機能は、本年より従来からするとはるかに大きくなります。

さて、県民の皆様が期待している展示会ですが、3月19日からは春季展として「2022年所蔵品展 至宝の名品－学芸員のイチオシ 考古資料編－」が開催されます。多くの方から「歴史館がどのようなお宝を所蔵しているのですか」と尋ねら

れますが、今年は考古資料を取り上げ、すばらしい所蔵品をお示しします。展示解説も昨年に引き続いて、できるだけ易しく、皆様に親しんで頂けるようなものにしていきます。

夏季企画展は「山伏－佐久の修験・大井法華堂の世界－」です。中世の修験道場として知られる大井法華堂に伝わったたいへん貴重な中世文書40点を含む、4400点あまりの文書が本館に寄贈されました。それらの文書をもとにしながら、自然への畏敬から発した修験道について、信州における実態に迫ります。

秋季企画展は「諏訪と武田氏」です。今年の長野県は諏訪大社の御柱、善光寺のご開帳など、ビッグイベントが続きます。そこで、諏訪と信玄で代表される甲斐の武田氏との関係を取り上げることにしました。御柱で諏訪に興味を抱いた皆様に、信濃国一宮の諏訪大社と武田氏との関係などを学んで頂ければと思います。

冬季企画展は「高遠藩の遺産－文化と教育－」です。本年は高遠城が廃城になって150年目にあたります。廃藩後の高遠藩の文化遺産などが地元でどのように引き継がれていったかを、目立ちにくい遺品にも目を配り、教育者として知られる伊沢修二などを育てた教育をも取り上げ、新たな視点から藩が消滅していくときの状況を考えていきます。

これらの展示名称からわかるように、本年の展示では各時代における信仰、教育、文化に力を入れました。長野県に蓄積され、変化を続けてきた文化の実情に迫り、皆様が今後生きていく上で自然といかに付き合うか、文化をどのようにつなぎ、人を育てていくかを考える契機になれば幸いです。

このように令和4年は本館にとってたいへん重要な年になります。引き続き皆様のご支援をお願いいたします。

秋季企画展『全盛期の縄文土器－圧倒する褶曲文－』を終えて

「全盛期」の背景をよむ

9月18日から11月23日まで、55日の会期で実施した「全盛期の縄文土器」は、県内外から8,562名の方にご覧いただき、無事終了しました。

● 全盛期とは何か

来館した皆様からは「全盛期の土器はすごい」という感想とともに、「なぜ煮炊き用の鍋をここまで豪華に飾ったのか」という問いかけをかなり多くいただきました。1万3千年以上にわたってつくられた縄文土器の文様としては、表面を篋や棒で刻んだ後晩期の精製土器などの凹文様や、早期からみられる顔料等を用いたペイント文様にも華やかなものが多くあります。ただ、今回対象とした縄文時代中期のうち5100年前からの150年間は、粘土紐貼り付け装飾および突起や把手の造形が極端に複雑化します。このような凸文様の過剰な発達が、来館者の皆様の「すごい」という評価に繋がったのだと思います。ではこの時期、貼り付け文様に傾倒した背景に込められた意味は何かのでしょうか。例えば、足りないものを補い、常態に戻るための祈りや願いを込めた記号の貼付が「貼り付ける」という作業の背景だったと想像してみるのはどうでしょう。

11月13日の講演会で安斎正人氏は、それまで安定していた社会にシステム崩壊のような危機的な状況が生じたときに、集団は、自分たちのアイデンティティを維持するために特定の道具に過剰なデザインを施す例を紹介されました。



企画展示室での展示の様子

● 気候変動と縄文社会

危機的な状況の背景として考えられる要素の一つに気候変動があります。近年の高精度放射性炭素年代測定や環境文化史研究の進展によって土器型式と気候の関係がかなり明らかになってきました。縄文時代早期後半から前期にかけて現在より2～3度高かった平均気温はその後下降に転じ、「全盛期」の頃には一時的な落ち込みがみられます。自然とともに暮らしてきた縄文人だからこそ、徐々に進む寒冷化に伴う変化を敏感に感じ、「足りなくなった」太陽のもたらす恵みを復活させたい。過剰装飾にはそんな祈りが込められていたのではないのでしょうか。

● 一堂に会した土器を見る視点

土器文様がアイデンティティの証であれば、複数の地域の文様が同居する水煙文土器のような傑出した土器の製作の際には、単に「他集団の文様を受け入れた」のではなく、受け入れる側が「文様の贈与を請い願った」という状況があったのかもしれません。展示室で一同に会した113点の土器を概観すると、一つの竪穴住居跡から出土した土器でも粘土の色や中に入っている岩石・鉱物に違いがあることが確認されました。そこで10月30日のこども体験講座では土器胎土を調べる方法として偏光顕微鏡観察を体験し、土器の「受け入れ」や情報の移動に思いを馳せていただきました。

本企画展を通じて、粘土紐の1本1本にまでこだわった縄文人の感性に深く触れると同時に、様々な方法を駆使してその動きをさらに細かく解明する研究を、次の世代に託していきたいと感じました。

(水沢教子)

2022年所蔵品展 至宝の名品

— 学芸員のイチオシ 考古資料編 — 大地からのメッセージ

1970年代から高速道路が長野県の各市町村を貫き、南端下伊那郡阿智村から岡谷市へ北上し、さらに東側富士見町、山梨方面へ中央自動車道が敷設されました。また長野自動車道が岡谷市から長野市方面へ、上信越自動車道が群馬県境の佐久方面から更埴JCTを經由して新潟県境の信濃町へ延伸していきました。90年代は1998（平成10）年の長野冬季オリンピックを契機に高速道路や北陸新幹線、幹線道路が急ピッチで整備されました。それらの建設にあたっては、長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、出土品の多くを長野県立歴史館で所蔵しています。

2022年所蔵品展では、昨年の絵画工芸品に続く第2弾として考古資料を展示します。およそ3万箱の収蔵品の中から学芸員がイチオシする逸品をご覧ください。

—— 最も古い重要文化財 ——

信濃町日向林B遺跡は旧石器時代（約3万年前）のムラで、世界最古級の磨製石斧が36点も見つかりました。一遺跡で見つかった数としては最も多く、石斧を磨くための砥石や台形石器とともに、219点の出土品が重要文化財に指定されています。国の重要文化財に指定されているもののなかでは最も古い時代のものになります。人が岩石を加工し、時間をかけて磨いて作った最も古い道具のひとつです。



信濃町日向林B遺跡の石器（当館蔵）重要文化財

—— 丸木舟が井戸杵に ——

長野市春山B遺跡では弥生時代後期（約1900年前）の井戸杵になっていた、不揃いのトチノキの木材群が見つかりました。それらを実測し接合したところ、全長289cm、最大幅64cm、最深長28cmの一木を削りぬいた丸木舟に復元することができました。これらの木材それぞれに浸透している水分を高分子化合物（ポリエチレングリコール）に置き換える処置を3年にわたって行い、さらに復元に16か月を要しました。荷物運搬用の丸木舟が用をなさなくなったのか、木材を井戸杵に転用したことがはっきり解る資料です。県内唯一の弥生時代の丸木舟です。



長野市春山B遺跡の丸木舟（当館蔵）

—— 緑色の高貴な陶器 ——

塩尻市吉田川西遺跡の10世紀の墓から緑釉陶器や漆器、鏡などがセットで見つかりました。お墓に副葬された状況がよくわかり、被葬者の社会的立場を考えるうえで貴重な資料として国の重要文化財に指定されています。



塩尻市吉田川西遺跡の緑釉陶器（当館蔵） 重要文化財

緑釉陶器は、奈良時代に中国から輸入された「唐三彩」を真似た「奈良三彩」がルーツで、鉛に混ぜる銅や鉄の量を調整して三色を発色させていました。平安時代には唐三彩に代わって越州窯青磁（昔は「越国」と呼ばれていた中国浙江省を中心に発達した東洋最古の越州磁窯で焼かれた青磁）が輸入されるようになり、それを真似た緑の単色にしていたのが緑釉陶器です。9世紀前半から150年間ほど生産されていました。碗や皿などの食器に使われていましたが、使用できたのは、身分の高い人たちに限られていたようです。

—— 村の中の仏教 ——

奈良時代以降、仏教は国分寺や各地の豪族が建立した寺を中心に地域に広まっていきました。平安時代になると、村むらにも仏教が浸透していったことがうかがえます。

長野市篠ノ井遺跡群からは、木造の五重塔を模して粘土で作られた「瓦製塔婆」ともいわれる瓦塔や、埴仏（仏像の形を浮き彫りにした粘土板）、仏事に使用される銅鉢などが見つかりました。瓦塔は2基分が確認されています。県内では20例ほどが知られていますが、組み立てて全体像が分かるものとしては、塩尻市菖蒲沢窯跡例（長野県宝）に次いで、2例目になります。菖蒲沢窯跡以外では主に集落で見つかったことから、集落のお堂のような場所に安置されたと考えられています。人びとが身近に仏教を信仰し、参拝する対象だったと考えられます。（飯島公子）



長野市篠ノ井遺跡群の瓦塔（当館蔵）

長野県立歴史館では長野県の歴史資料を収集・整理・保存・保存処理し、誰もが活用できるように公開しています。また館蔵品以外の資料についても選択的にデータベース化することにより、広く情報共有できる環境の整備を目指しています。そこで、今回は考古資料のデータベース化に係わる近年の作業の事例を紹介します。

1. 土偶データベース

令和元年度、開館25周年記念特別企画として国宝土偶5点および県内各地の土偶を対象とした『土偶展』を行いました。それに伴い、県内市町村や長野県埋蔵文化財センターの担当者の皆さん14名とともに「土偶研究会」を設立し、全県の土偶情報の収集を開始しました。データの収集にあたっては、担当者も含め県内全ての市町村教育委員会の皆さんにお手伝いいただきました。集成項目は土偶の出土地や時期、大きさの他、報告書や市町村誌等で図版が公開されているものについてはできる限り再録しています。

集成の結果、特別展の図録等で「2000点を越える」と紹介してきた長野県出土土偶は、令和3年3月時点で4223件（うち3749件には実測図版あり）であることが判明しています。昨年3月末にはHP掲載用の編集作業に入っており、来年度には当館HPからご覧いただける予定です。土偶データベースによって魅力ある長野県の土偶に関する研究がさらに進むことが期待されます。

（水沢教子）

2. 考古資料のデータベース

当館では長野県埋蔵文化財センターが発掘調査した208遺跡の考古資料を保管しています。発掘調査報告書に掲載された遺物や記録類を閲覧できるようにしています。今回は、現在進めている写真記録のデータベース化についてお話しします。



当館所蔵の記録写真フィルム

当館で所蔵する発掘調査の記録写真は10万カットを超えています。発掘調査の記録写真の一部は発掘調査報告書に掲載されているので、図書館などで見ることができますが、それは写真記録のごく一部です。遺跡の詳しい情報を得たい人や研究をする人にとっては十分とは言えません。しかし、報告書に掲載されたもの以外にどんな写真があるのかは外部の人にはわかりません。

発掘調査の記録写真は古いものだと、40年以上前に撮影されたものもあり、フィルムの劣化が見られます。写真の保存と公開活用を目的として、平成29年からカラーフィルムのデジタル化を進めています。昨年までに22,350カットのデジタル化を終了しましたが、全体が終わるまでにはまだ何年もかかります。報告書に掲載された写真を優先的にデジタル化し、可能な範囲でWeb等での公開を目指しています。

写真の中にはこれまで気が付かなかった重要な情報が隠されているかもしれません。写真の検索をスムーズに行えるように整理することで新たな発見を促すことを期待しています。発掘調査の図面記録等についても、デジタル化を進める計画を検討しています。発掘調査情報にアクセスしやすい仕組みを作り、考古資料を考古史料へと昇華することを目指して、作業を進めています。

（鶴田典昭）

文献資料
を読む

長野県立歴史館 「長野県測量図」・「絵図地図」 閲覧システム

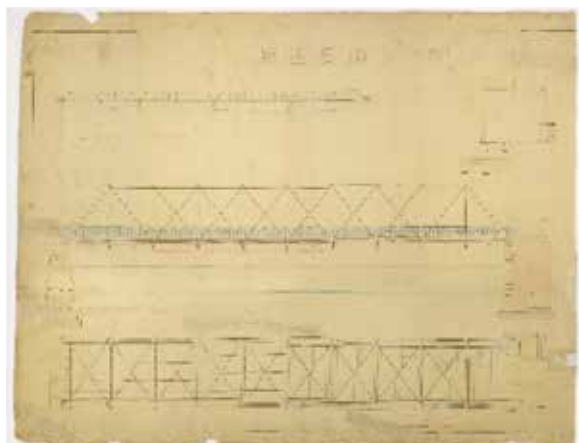


写真1 長測図 270 上田橋之図（四号間）

長野県立歴史館には、明治から大正にかけて作成された膨大な図面資料が残されています。そのなかでも「長野県測量図」（長測図）は偶然にも、県庁の書類として長らく保管され、県立長野図書館の倉庫を経て平成6年開館の当館に移管されたものです。これらは近代初頭における長野県の土木事業のあり方を知ることができる貴重な資料群であると言えます。

調査の結果、全体点数は3000点あまり、そのなかでも「道路測量、設計図」がもっとも多く、約1450点を占めています。これは道路建設や改修工事が各地で活発に行われたことを意味します。1882（明治15）年、当時長野県の県令大野誠は七道開鑿事業を債権を発行して実施する事業として県会に提案しました。長野県の産業、蚕糸業の発展には馬車、荷車、人力車が通れる道が必要であると考えたのです。生糸や繭を「車」で運搬するためです。そのため道路の勾配をできるだけ緩くし、碎石を敷き、馬車交通にできるだけ適応できるように道路を開鑿するために設計図が必要となりました。

道路改修とともに、河川を渡る橋梁の改修も考えられるようになっていきます（写真1）。鉄と木材が使われ、荷重に耐えられるような構造のト

ラス橋梁が設計され馬車交通が容易になりました。

次に多く所蔵しているのは河川の測量図で、700点あまりあります。千曲川、天竜川など大河川を長野県が管理していた時代、河川改修工事のために作成されたものです。明治の治水工事のあり方を知ることができます。「長野県測量図」に描かれている流路と現代の流路との比較から、土地利用の変化などの分析をし、水害防止に役立てようという研究活動も始まっています。

これらの測量図には長さ10mをこえるものがあり、輸入品であるケント紙という洋紙に書かれています。丸めて筒状にして保管されていたこともあり大変脆く、開いて閲覧するには困難を極めていました。そこで、平成24年度から公益社団法人長野県土木学会が測量図、地図の撮影を行い、歴史的な水害史料活用研究会の協力も得て、2021（令和3）年11月から、当館の閲覧室で画像により閲覧することが可能になりました（写真2）。



写真2 長野県立歴史館「長野県測量図」・「絵図地図」閲覧システム

全3000点あまりのうち約900点がデジタル化され、図面全体はもちろん、部分的に拡大することも可能で字や描写も細かいところまでご覧いただけるようになっていきます。

ぜひ一度お出かけになり、閲覧システムをご利用ください。（入沢昌基）

INFORMATION

インフォメーション



■ 2022(令和4)年 3月～6月の行事予定

3月

休館日
1～4
7・14
22・28

2022年 所蔵品展

至宝の名品
—学芸員のイチオシ—
考古資料編—
大地からのメッセージ

3月19日(土)～6月12日(日)



千曲市屋代遺跡群の大木9式系土器
縄文時代中期(約4800年前)当館蔵

講座・イベント

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、講堂で催行する講座・イベント等を3月末まで中止させていただきます。3月5日の県立歴史館信州学講座および3月20日・21日・23日の親子映画会も中止となりました。

長野県埋蔵文化財センター
速報展

「掘るしん2022」

2022年所蔵品展
「至宝の名品」と同時開催

4月

休館日
4・11
18・25

5月

休館日
2・6
9・16
23・30



千曲市社宮司遺跡の六角宝幢 複製品
平安時代末期(11～12世紀)当館蔵

歴史館でこどもの日

5月5日(木・祝) 各種イベント

各講座の日程概要

- ・4月30日(土) 考古学講座①
- ・5月7日(土) 県立歴史館の信州学講座①
- ・5月28日(土) 古文書講座(上級①)
古文書演習
- ・6月4日(土) 古文書講座(中級A①)
信州学講座②
- ・6月5日(日) 古文書講座(初級A①)
- ・6月9日(木) 古文書講座(初級B①)
古文書講座(中級B①)
- ・6月12日(日) 考古学セミナー
- ・6月18日(土) 考古学講座②
- ・6月25日(土) 古文書講座(上級②)
古文書演習

6月

休館日
6・13
20・27

表紙写真の解説

上田市陣馬塚古墳の直刀(当館蔵)

上から3号刀・4号刀・5号刀

陣馬塚古墳から出土した直刀9本のうちの3本です。唯一3号刀に装着されていた鐔などの刀装具には、銀象嵌文様が施されていました。X線を透過し鉄さびを落とした結果、象嵌文様が見つかったものです。

富士見町札沢遺跡の動物装飾付釣手土器
(背面から) (当館蔵) 長野県宝

4匹のヘビを思わせる動物が釣手部に貼り付いている縄文時代中期の土器で、ランプとしての用途が推測されます。



冬季企画展「没後80年 郷愁の画家
丸山晚霞」(1/15(土)～2/27(日))の展示
作業の様子

行事アルバム



秋季企画展講演会：11月13日(土)には「4900年前の大変動」をテーマに、安斎正人氏の講演会が行われました。熱のこもったお話に61名の皆さんが熱心に聞き入りました。



近世史セミナー：12月4日(土)、「感染症と向き合う」をテーマに、塩沢元広氏は「江戸時代の感染症と人々の対応～南信地域の事例から～」、青木教司氏は「筑摩郡旗本諏訪氏領松本藩における幕末の感染症対策」と題して研究発表いただき、約30名が受講されました。江戸時代の人達の感染症対策はコロナ禍にも通じるものがありました。



特設考古学講座：今年度は「本物の遺物を触って、歴史を楽しむ」をテーマに特設講座を設けています。12月4日(土)の第2回特設講座は「石器を調べよう」と題して、旧石器時代から弥生時代の磨製石斧を並べて観察しました。手に触れることで分かることがある、と好評でした。

正誤表 以下修正をお願いします。
『長野県立歴史館たより 秋号 vol.108』
1p下から1行目：誤「渦巻きドーム形：右写真」→正「渦巻きドーム形」
1p右下写真キャプション：誤「笛吹市釈迦堂遺跡」→正「甲州市釈迦堂遺跡」

長野県立歴史館たより 春号 vol.110

2022(令和4)年2月9日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 奥山印刷工業株式会社